知ることの大切さ

甲斐市立竜王中学校三年　三浦　志温

「行ってきます」父は毎朝そう言って会社に行きます。私が寝ぼけていて何も言わずにいると父は必ず私の所に来て、起こしながら「行ってくるよ」と言います。私が「行ってらっしゃい」と言うと父は「志温も気を付けて行って来るんだよ」と出かけて行きます。それが我が家の毎朝の出来事です。

私の家族は父と母そして私の三人家族。贅沢とは言えないまでも、衣食住には困ることはなく中三になるこの年まで育ててもらっています。母方の祖父母には毎日のように会い、学校では勉強や部活のソフトテニスに打ち込む毎日を送ってきました。ここまでがこの作文を書くまでの私の初夏の日常です。

多分この作文を書くにあたり「人権とは」という壮大なテーマについて皆さん悩んだのではないでしょうか。私も人権といわれると「ＬＧＢＴ、人種差別、男女差別、学歴、生まれや育ちなどなど」様々な差別があることを再認識しました。その為、何を書いていいか悩みました。そう考えるとそこら中に人権問題があることに気付きました。私もこの島国日本という国から一歩外へ出れば外国人。地元以外の県に住めば、県外人、それも立派な差別なのかも知れないと思うようになりました。私の今いる世界では違う中学なら他校、学年が違えば上級生、下級生となってしまうわけです。その中でも細分化していけば、スポーツが出来る、勉強が出来るなどなど、そしてその逆もあるわけです。

私は部活でソフトテニス部に所属していました。二年生にもなると、大会にも出場出来るようになり、上手くはないなりに一生懸命頑張ってきました。でも一年生の時から組んでいたペアとの別れがありました。世にいう「音楽性の違いや、方向性の違い」と言えれば格好付けられるのですが、内容は至ってシンプル。お互い自分の方がというエゴ。あの頃の私達は、自分の意見を言うだけで、ペアの話にはお互い耳も貸さずにプレーしていました。それでは勝てるはずもなく、雰囲気も悪くなるわけで、他のメンバーにも影響が及んでしまうわけです。そして敢え無くペア解散になってしまいました。その後もお互いケンカ別れでは無いため、現在も仲良くしていますが、三年の大会では自分なりに健闘はしたものの、三年の中で私だけ先に個人では引退になってしまいました。悔しくないと言えば嘘になりますが、一生懸命、切磋琢磨してきたメンバーが次の大会に行けることを誇らしく思えました。ただ試合が終わった後、監

督達に報告にいった際、涙が溢れ出てきてしまいました。必死で堪えようとしましたが、ここまで教えて頂いた監督達、砂埃にまみれながら、三年間一緒に過ごし練習してきた仲間達、そして私の事を応援するために、会社を休んでまで見に来てくれた両親や祖父母を近くに感じると色んな感情で、出始めた涙はなかなか止まってはくれませんでした。その時元ペアから言われた「お疲れ様」その言葉は私の心に深く刻まれました。

「人権とは」と父に聞くと即座に「人間性尊重」と答えました。なぜかと聞くと「ウチの会社の製造する上での基本理念だからだよ」と笑いながら言いました。最近、公式で飲み会に行けるようになったと言う父は、「なるべく喋る機会が少ない人の席に行くようにしているんだよね。色々な話も聞けて、新しい一面も知れるし、何よりも会ったら挨拶をしてくれるようになり、困った時すぐに助け合えるよね。それが人間性尊重」と楽しげに話す父を見て少し分かってきた気がしました。

私にとって人権とは、人を否定するのではなく、理解し合う事が大切なのだと。相手のことを理解していないから喧嘩をしたり、馬鹿にしたり、いじめや差別が始まってしまうのだと。色んな人がいる事は当たり前で、自分という存在も一人しかいない事実をしっかり理解しないといけないということを。自分と違うから理解出来ないじゃなく、話しをして、相手を知ろうとしなければ何も始まらないし、良い方向へ進んで行く事は無いからです。どんな人権問題でも当てはまっている事の多くが、相手への意見を聞かないままでの否定や批判による間違った解釈からなるものだと思うからです。

今思えばなぜあの時もっとペアと話し合わなかったのか。相手が何をしたいのか。どんなプレーを目指しているのか。あの時の私はペアの人間性を尊重したか。その上で話し合いをお互いすれば少しは違った結果になっていたかも知れないと。

ちょうどこの作文を書き上げるその頃、私は個人では引退をしましたが、その後の団体戦では見事ペア復活を果たし、入賞をこの手に掴むことが出来ました。この「人権」について考え、行動する事が出来たからこそ、この作文の最後の数行の思い出も掴むことが出来たのだと思います。